

実践報告

保育士養成課程における学生の自主的な学びに関する実践報告：
子どもの英語の歌を用いた活動船田 まなみ¹⁾・執行 智子²⁾・カレイラ松崎順子³⁾Incorporating Elements of Active Learning in an Early Childhood Education Course:
The Case of the Use of Children's English SongsManami Funata¹⁾, Tomoko Shigyo²⁾ and Junko Matsuzaki Carreira³⁾

要約

本研究では、保育士養成課程の学生に対し、アクティブラーニングを取り入れた「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を行い、その活動を学生がどのように感じたか、さらに学生にどのような気づきがあったかを調査した。活動終了後行った振り返りシートにおいて、本活動に対し肯定的な記述が多くみられた。また、発表、発表準備、子どもの英語の歌に関しての気づきがあったことも分かった。子どもの英語の歌に関しては、将来保育士になったときに子どもに教えてあげたいなど、将来をみすえた意欲的な記述も見られた。

キーワード：保育士養成課程、子どもの英語の歌、アクティブラーニング、協同学習

1.はじめに

日本保育協会（2008）は、平成20年の時点で保育所に入所している外国人児童数を13,000人以上とする調査結果を報告している。さらに鈴木(2015)は、保育士不足の解消の糸口として、外国人保育士の増加を予想している。保育士は保育を受ける児童、保護者だけでなく、同僚とのコミュニケーションで英語を使用する可能性が増えると言えるが、それに伴う問題点として英語でのコミュニケーションの困難が挙げられる（木浦原・真宮, 2014）。そのため大学の保育士養成課程の学生にとって英語を学ぶことは

今や必修の教養科目だからと言えないようである。実際に筆者が短期大学の保育士養成課程の1学年（80名）に4月の講座開始時にアンケートを実施したところ、83%の学生が英語が苦手と答えている。一方、92%の学生が英語を身につけることは重要で将来的に役立つと答えており、保育士養成課程の学生の実態として英語は苦手だが必要だと認識していることは明らかである。

カレイラ（2009）は、保育士養成課程のカリキュラムにESP（English for Specific Purposes）を導入する可能性を研究するため、学生のニーズに焦点をあて、アンケートをした結果「保育士になるために

1) 船田まなみ 東京未来大学子ども心理学部非常勤講師 (Tokyo Future University) mmiya.oki.cha.1205@gmail.com
 2) 執行 智子 東京未来大学子ども心理学部 (Tokyo Future University) shigyo-tomoko@tokyomirai.jp
 3) カレイラ松崎順子 東京経済大学現代法学部 (Tokyo Keizai University) carreira@tku.ac.jp

どのような英語を大学で学びたいか」の質問において、多くの学生が「簡単な英語を覚えられるような歌を覚えたい」と答えたことが明らかになった。さらに、カレイラ（2009）の追跡調査を行った加茂・藤原（2013）でも、子ども向けの英語の歌を学びたいという記述の他に、子ども達の身の回りや生活に関する英単語や表現を学びたいという記述もあり、保育士養成課程の学生は「比較的『手頃』で、使える知識や技能を身につけたい」（p.90）と考えていることが分かった。これらの研究より保育士養成課程では、子どもの英語の歌などを用いた実用的な英語の授業を行うことが望まれていることが分かった。

本研究では、保育士養成課程において子どもの英語の歌を取り入れた学生主体の発表形式のアクティビティである「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を行うことで、学生がどのように感じたのか、さらに学生はどのようなことに気づいたのかを報告する。

2. 先行文献

2.1 子どもの英語の歌

英語の歌を英語学習に取り入れる効果の研究では、「聞く力」を育てる（小川・東, 2017）、英語のリズム（プロソディ）が習得できる（中山・廣瀬, 2014）、学ぶ楽しさや参加する楽しさを与える（阿部, 2010）、さらに、コミュニケーションスキルを伸ばす（阿部, 2010）ことが明らかになっている。阿部(2010)は、英語の歌を歌うことは、英語が持つ独特なイントネーション、ストレス、リズムに馴染むことができ、自然な英語の話し言葉を習得するための基礎作りとしてすぐれた英語学習法だとしている。小川・東（2017）は、英語の歌を歌うことは、聴覚、視覚、運動感覚、触覚の複数の感覚を使うことで、英語が自分の言葉になりやすく、次第にすぐに言うことが出来るようになるので、自然な形で受信から発信へと繋がっていきやすいと述べている。

カレイラ（2011）は、保育士養成課程の英語の授業において、ポートフォリオ学習を取り入れ、ESP

的アプローチを実践し、「子ども用の英語の歌を歌う活動」を行った。その結果、「子ども用の英語の歌を歌う活動」は学生の学習意欲を促進する上で効果が検証されたとし、保育士養成課程の英語の授業に「子ども用の英語の歌を歌う活動」を積極的に取り入れていくことの有効性を報告した。今村（2015）では、保育士養成課程において、子ども向けの英語の歌を学習することに対して、学生は、英語の歌を歌うことは楽しく、やりがいがあり、満足感や自信を得たと感じており、英語の歌を歌うことは英語学習の動機を高めると報告している。

五十嵐（2014）は、保育の現場において、学生が英語の歌を歌う活動を行った結果、学生がそれまで抱いていた苦手意識や嫌悪感などのイメージを変えることができたと報告している。また将来、保育の現場において子どもと一緒に英語活動を楽しむには、大学教育において学生に英語の楽しさを伝えることが重要であると主張している。以上のことから、保育士養成課程において、英語の歌を英語の授業に取り入れることは、英語特有のリズムや音声を体感しながら学ぶこと、英語が苦手な学生でも積極的に楽しんで英語を学ぶこと、保育士として楽しんで英語活動をする基盤を作ることを可能にするといえる。

2.2 アクティブラーニング

中央教育審議会（2012）で、一方的な知識の注入を中心とした授業から、双方向的なアクティブラーニングへの転換が必要であると提唱された（p.9）。中央教育審議会が提唱するアクティブラーニングとは「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく」（p.9）ことであり、学生は主体的な学習の体験を重ねることで生涯学び続ける力を修得できるとし、大学でのアクティブラーニングの重要性を挙げている。元々アクティブラーニングの概念はアメリカから来ており、Bonwell & Eison（1991）では、以下のように定義している。

- ・ Students are involved in more than listening. 学生は聴く以上のことをおこなう
- ・ Less emphasis is placed on transmit information and more on developing students' skills. 情報の伝達よりも学生の技能の育成に重きが置かれる
- ・ Students are involved in higher-order thinking (analysis, synthesis, evaluation) . 学生は高次の思考 (分析や統合・評価) を働かせる
- ・ Students are engaged in activities (e.g., reading discussing, writing) . 学生は活動 (読む・議論する・書くなど) に従事する
- ・ Greater emphasis is placed on students' exploration of their own attitudes and values. 学生自身の態度や価値の探求に重きが置かれる (p.2)

Gally (2016) は、アクティブラーニングとは「先生から受動的に教えられ学期が終わったらすぐ忘れてしまう知識よりも、自分の力で究明した原則などの方が長く頭に残って将来にも役に立つ」(p.105) と述べ、involveする (関わる) ことの重要性を述べている。森・溝上 (2017) では、「一方的な知識伝達型講義を聴くという (受動的) 学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(p.6) と、活動への関与と認知プロセスの外化がアクティブラーニングによって引き起こされるとしている。また、岩居 (2017) は、「学習者が主体的に行動し、学び、振り返ることを可能にする授業方法 (p.81)」とアクティブラーニングを定義している。

奥羽 (2016) は、大学入学前の高校生に向けてアクティブラーニングを取り入れたプログラムを行ない、その結果「自信」や「達成感」を得た生徒が多かったことが明らかにしている。石原 (2016) は、高校2年のコミュニケーションの授業でアクティブラーニングを導入し、教え合う活動を行なった結果、「教えることで学習は深まると思う」(p.69) という肯定的な記述が多く見られ、生徒の授業を受ける立場での受身的な態度と、教える側に立ったときの取り

組み方の違いに関しての気づきが多くみられたと報告している。白井 (2011) では、協同学習に注目し、グループでの活動の中にアクティブラーニングを取り入れたところ、多くの知識や情報を獲得し、理解を深めることより、課題解決また各自が調べた学習成果を集約するための協調性や、役割の重要性を認識するようになったことを報告している。山邊(2016) は、大学生にアカデミック・スキルの習得を目的とした授業で社会問題に対して独自の観点で課題を発掘し、現状を分析し、問題を明らかにし、議論を展開していくアクティブラーニングを取り入れたところ、大学での学びへの能動性の喚起、社会への貢献の意識に加えて、問題の調査過程の面白さに学生がアンケートで言及していたことが分かった (p.90)。以上のことから、アクティブラーニングは主体性を育て、学習者の気づきを促進し、学習への取り組み方を変化させ、学習意欲の向上へつなげることができることが期待できる。

2.3 リサーチクエスト

子どもの英語の歌に触れることは、効果的な英語学習方法であり、また学習への意欲を高める。さらにアクティブラーニングで授業を行なった方が学習者の学習への取り組み方が主体的になると言える。そのため本研究では、子どもの英語の歌とアクティブラーニングを取り入れた「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を開発し、その活動が、保育士養成課程の学生にどのような影響を及ぼすのか検証した。具体的なリサーチクエストとして以下の2つを設定した。

- (1) 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を学生はどのように感じているか。
- (2) 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を通して、学生にどのような気づきがあったか。

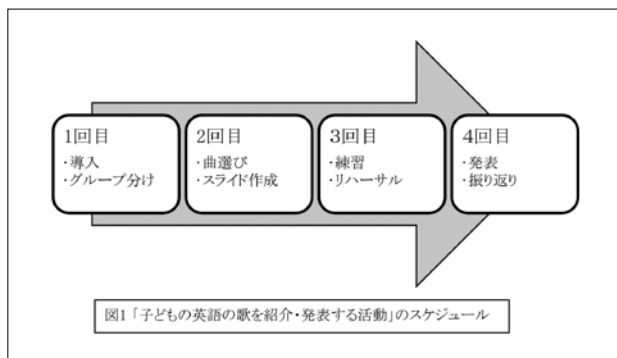
3. 本研究

3.1 目的

本研究では、保育士養成課程の学生に対し、アクティブラーニングを取り入れた「子供の英語の歌を紹介・発表する活動」が学生の気づきや取り組みにどのような影響や変化をもたらすかを調査していくことを目的にする。

3.2 研究参加者及び授業内容

本研究の参加者は、短期大学の保育士養成課程1学年の80名の学生である。授業で使用しているテキストは『Happy English for Childcare』（金星堂）であり、通年科目（全30回）の授業である。学生の特徴として、英語を声に出すことや歌を歌うことに比較的抵抗がなく、活発である。毎回の授業は、ice breakingにMother Goose/nursery rhyme、chantsなどを歌い（10分程度）、その後テキストで学ぶという構成である。本研究は、この30回のうち5月25日から6月15日までの4回の授業において、後半45分を利用し、「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を行った。アクティブラーニングを取り入れ、グループを編成し、学生ら自身で子どもの英語の歌を調べ、そこから一つ選び、その曲について調べたことをパワーポイントにまとめ、クラスメイトに発表する活動である。「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」の日程は、以下の通りであり、4回の授業の中で準備と発表を行った。



1回目

テキストにある *One little Pumpkin* の歌を導入に使用した。その後1グループ4人（合計20グループ）を編成し、残った時間でインターネットを活用し子どもの英語の歌を探した。

2回目

授業90分のうち45分を本活動にあてた。担当教員から、選曲の条件として、音声・映像のある曲を選ぶように指示した。選曲後、パワーポイントのスライド作成、歌の練習をした。4枚程度のスライドに、タイトル、歌詞、映像、歌う時のポイントが含まれているように指示をした。歌う時のポイントは、各グループでどのように歌いにくい部分を歌いやすくなるかなど、グループで話し合い気づいたことをスライドにまとめた。

3回目

完成したスライドを使用しながら、グループごとに発表の練習を行った。

4回目

各グループ約8分の発表後、各自振り返りシートに記入をした。

3.3 分析方法

「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」をしたことに関して振り返りをするために、自由記述式のアンケートを4回目の発表後に一度実施した。その学生が記述した振り返りシートを筆者が分類し、分析を行った。発表当日2名の学生が欠席したため、振り返りシートは78名分である。

3.4 結果

学生が選んだ曲は以下のとおりである。（ ）内は選曲したグループ数である。

If you're happy (3) , *Head, Shoulder, Knees and Toes* (2) , *Tengu song* (2) , *Wind the Bobbin up* (2) , *Hokey Pokey Shake* (1) , *Clap your Hands* (1) , *A Rolling Acorn* (1) , *Let's Clap our Hands* (1) , *Caterpillar Song* (1) , *Open Shut Them* (1) ,

The Finger Family (1) , *Twinkle Twinkle Little Star* (1) , *Make a Circle* (1) , *Under the Spreading Under the Tree* (1) , *Incy Wincy Spider* (1)

3.4.1 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」 をして学生が感じたこと

リサーチクエスト (1) 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を、学生はどのように感じているかに関して調査するために、事後に行った振り返りシートの学生の記述をもとに、「良かった」「楽しかった」「難しかった」「緊張した」「嬉しかった」「その他」の項目に分類した。以下は、それぞれの項目を記述した人数である。なお、一つの記述が複数の項目に含まれている場合もある。

表1 事後に行われた振り返りシートから抽出された本活動への感じたことに関する結果

抽出された項目	人数
良かった	41名
楽しかった	22名
難しかった	12名
緊張した	10名
嬉しかった	5名

それぞれの項目の記述を見てみると、

良かった (41名)

「良かった」と感じている中には、以下のような記述があった。

・クラスの反応…15名

「みんなに歌う際のポイントが上手く伝わったか不安だったが、うなずいてくれたり、歌っているときに気を付けてくれている感じがして良かった。」

「みんなが私たち班の真似をして歌ったり、手遊びをしてくれたので良かった。英語で歌うこともないのでとても良い機会でした。」

・知識が増えた…10名

「英語の手遊び歌は、英語の授業以外で知る機会がないので、今回たくさんの歌を知ることができて良かった。」

「この曲は英語だところうんだ!と知識も増えたので、良かった。」

・発表が上手くできた…10名

「発表がスムーズに進行して良かった。」

「スライドを上手く作ることができた。」

・グループの活動…4名

「グループでの話し合いでは、しっかりと話し合い、良い発表ができた。」

「グループ内のみんなで作業を役割分担できた。」

・その他…2名

「みんなが覚えて歌えるようになったので、この曲 (*Twinkle Twinkle Little Star*) を選んでよかったです。」

楽しかった (22名)

「楽しかった」と感じている中には、以下のような記述があった。

・クラスの反応…7名

「みんなでとても楽しんで歌っていた。自分自身も楽しめた。」

「みんな円になって楽しく踊ることができた。(曲 *Make a Circle*)」

・歌や動きについて…7名

「いろいろなグループがそれぞれ違った歌を選んで、初めて聞いた歌がたくさんあった。振り付けを付けることで歌が楽しくなった。」

・発表自体…6名

「それぞれの班が作ったパワーポイントの画面がかわいくて、見ていて楽しかった。」

・グループ活動について…2名

「グループのみんなが一緒に案を出し合えたことが楽しかった。」

難しかった (12名)

「難しかった」と感じている中には、以下のような記

述があった。

・子どもの英語の歌について…7名

「英語の発音が難しかった。」

「歌いながら手や身体を動かすのが、日本語でやる
ときよりも英語の方が難しく感じた。」

・教えることについて…3名

「実際に自分たちでやってみて初めてのものを教える
にはとても難しいと感じた。」

「前に立った経験がないので、みんなを参加させる
のはとても難しい事だと思った。」

・プレゼンテーションについて…2名

「前に出て発表することは難しく、自分が伝えたいこ
とをうまく言葉にできなかったので、発表する際に、
何回も練習が必要だと思った。」

緊張した (10名)

「緊張した」と感じている中には、以下のような記述
があった。

・発表に関して…10名

「発表するとき、緊張してしまい、声が小さくなって
しまった。」

嬉しかった (5名)

「嬉しかった」と感じている中には、以下のような記
述があった。

・クラスの反応…4名

「思った以上にみんなが踊ってくれて嬉しかった。」

・活動自体…1名

「これから「先生」という立場でみんなをまとめてい
くので、こういう体験ができてとても嬉しかった。」

3.4.2 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」 を通しての学生が気づいたこと

リサーチクエスチョン (2) 「子どもの英語の歌を
紹介・発表する活動」を通して、学生にどのような
気づきがあったかに関して調査するために、事後に
行った振り返りシートの学生の記述をもとに、「発表
に関して」「発表の準備について」「子どもの英語の

歌に関して」の項目に分類した。以下は、それぞ
れの項目を記述した人数である。なお、一つの記述が
複数の項目に含まれている場合もある。

表2 事後に行われた振り返りシートから抽出された
気づきに関する結果

抽出された項目	人数
発表に関して	28名
発表の準備に関して	27名
子どもの英語の歌に関して	25名

それぞれの項目の記述を見てみると、

発表に関して (28名)

発表自体に関して、以下のような記述があった。

・達成感…12名

「何度も練習して発音でつなげるところもうまく歌え
るようになった。」

「パワーポイントはイラスト入れたり、色をつけたり
と、見やすく作ることができた。」

・発表態度…10名

「自信を持って大きな声を出せると良かった。」

「大きく手の振りができなかったのが悔しい。」

・次回の発表に対して…6名

「自分たちの発表だけでなく、他の班の発表の工夫
も見ることができたので、次回発表する機会があっ
たら参考にしたい。」

「また違う発表をやってみたい。」

発表の準備に関して (27名)

発表の準備に関して、以下のような記述があった。

・準備不足…15名

「発表がグダグダになってしまったので、計画的に
もっと行えば良かった。」

「もう少し丁寧に振りを教えてあげれば良かった。」

・歌の練習不足…8名

「自分たちも完璧に歌を覚えられていなかったので、
みんなも完璧に歌うことが難しかったと思う。」

「もう少し発音とか単語を理解して歌うことができ

ば良かった。」

・グループワークについて…4名

「みんなで協力してアイデアを出してくれて、パワーポイントを作ることができた。」

子どもの英語の歌に関して (25名)

子どもの英語の歌に関しての記述は、以下の通りである。

・将来の職業につなげる…11名

「みんなの発表を聞いていろんな英語の手遊び歌を覚えたのでこれから日本語の手遊び歌だけでなく、英語も子どもたちに教えていきたい。」

「結構簡単なので小さい子と一緒にやるのも楽しいなと思った。」

・知識につなげる…8名

「他にも英語の曲を調べたい。」

「知っている歌でも英語にするとまた違う楽しみ方になることを知ったので、英語の歌をもっと知りたいと考えるきっかけになった。」

・発音について…3名

「発音を理解して歌うことができれば良かった。」

・繰り返し行うことの大切さ…2名

「何回も繰り返し歌うことで覚えてもらえたので、1回ではなく何回もやるのが大切だと感じた。」

・文字について…1名

「文字があると歌いやすいと思った。」

4. 考察

4.1 リサーチクエスト (1) 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を通して、学生はどのように感じているか。

リサーチクエスト (1) 「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を、学生はどのように感じているかに関して調査するために、事後に行った振り返りシートの学生の記述をもとに、「良かった」、「楽しかった」、「難しかった」、「緊張した」、「嬉しかった」の項目に分類し分析した結果、78名の学生のうち60名の学生が「子どもの英語の歌を紹介・発表する活

動」に関して「良かった」、「楽しかった」、「嬉しかった」と概ね肯定的に受け止めていた。

肯定的な記述では、クラスメイトの反応についての記述が一番多く、「みんなが私たち班の真似をして歌ったり、手遊びをしてくれた」、「上手く伝わったか不安だったが、うなずいてくれた」、「みんな楽しんで歌っていた」と、一方的なプレゼンテーションではなく、聞き手であるクラスメイトが反応したり一緒に歌ったりしたことに喜びを感じた学生が多くいたことが分かる。プレゼンテーションの中にも学生同士が相互に関わる場面があったと言える。発表する際もクラスメイトの様子や態度や表情を見ながら、発表者は聞き手とインターアクションをし、発表に引き込ませる工夫をしていた。聞く側は発表を聞いているだけでなく、一緒に歌ったりと参加型の発表になっていた。

次に多かった記述は、「今回たくさん歌を知ることができて良かった」など、本活動を通して、子どもの英語の歌に関する知識が増えたことである。自分で子どもの英語の歌を調べたり、他の班の発表から多くの子どもの英語の歌を学ぶ事が出来たことを記述している学生が多く、知識が増加したことに満足感があつたようである。

白井 (2011) では、アクティブラーニングの授業で多くの知識や情報を獲得できると報告しているように、自分で調べるだけでなく、グループで協力して調べる、さらに他者の発表を聞いて知ること、子どもの英語の歌に関しての多くの知識を得たと言える。今村 (2015) で、学生が選んだ曲の特徴として、日本語版がある曲を選択する傾向があつたと報告しているように、本研究の学生もすでに日本語で知っている歌を選んだ傾向があつた。「この曲は英語だところ歌うんだ!と知識も増えたので、良かった。」と日本語版の歌と英語版の歌の違いに注目した記述もあつた。子どもの英語の歌について、「振り付けを付けることで歌が楽しくなった」のように、それに付随する動き (振り付け) について言及するものも見受けられた。小川・東 (2017) は複数の感覚を使う

ことで、英語が自分の言葉になり、自然な形で英語を発信することができるようになると言語を習得する際に必要であると述べていたが、複数の感覚を使い歌うことは歌うことに加えて楽しい気持ちも生むようである。五十嵐(2014)で、将来子どもたちと英語活動をするかもしれない学生にはまず英語の楽しさを伝えることが大切だと述べており、本活動は英語が楽しいという印象を保育士養成課程の学生に与えられたことは、学生の将来に大切なことであったと考える。

グループワークについての記述も見受けられた。子どもの英語の歌を選ぶ際、またスライドにまとめる際に、「グループのみんなと一緒に案を出しあえたことが楽しかった」、「作業を役割分担できた」と、協同学習に対する評価の言及があった。白井(2011)はグループ活動の導入で、各自が調べた学習成果を集約するための協調性や、役割の重要性を認識するようになったと報告しているように、本活動は、グループのメンバーが一つの課題に各々の持っている知識やアイデアを出し合い取り組んだこと、また役割分担での作業をすることで自分ができる部分を担当したので、メンバーの1人としての自覚が生まれたのではないだろうか。実際、子どもの英語の歌調べは、各々の作業になっていたが、グループで歌を決める際、スライドを製作する際には、ICT(Information and Communication Technology)が得意な学生、歌うことが得意な学生、英語が得意な学生など、それぞれの得意な分野を分けて担当している様子が見受けられた。また、パワーポイントの使用経験がない学生に教えあっている場面もあり、他者との関わりの中で学ぶこととアクティブラーニングが深いつながりがあることが分かる。

「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」は、「難しかった」、「緊張した」と記述した学生は18名いた。英語の歌を歌うこと、プレゼンテーションが難しかったと言う学生の他に、発表でみんなに教えることについて難しいと言う記述もあり、奥羽(2016)の研究で授業を受ける側と教える側の取り組み方の違い

への気づきが多くみられたとあるように、この活動を通して、教える側に立ったときの取り組み方への気づきがあったということにつながることであろう。また、発表経験のない学生がいたことも「難しかった」、「緊張した」という記述が散見された理由ではないだろうか。大学までにアクティブラーニングのような自主的な学習を経験していない学生がいるということは、まだまだアクティブラーニングが日本の教育現場で浸透していないことを表しているのではないだろうか。

以上から、保育士養成課程の学生は「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を聞き手の反応、知識の増加、グループ活動における役割と責任などの点で肯定的に感じている。一方で、経験不足のために不慣れなプレゼンテーションに対して難しさや緊張感があったと感じていた学生も複数いたことが分かった。

4.2 リサーチクエスト(2)「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を通して、学生にどのような気づきがあったか。

リサーチクエスト(2)「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を通して、学生にどのような気づきがあったか調査するために、事後に行った振り返りシートの学生の記述をもとに、「発表に関して」「発表の準備に関して」「子どもの英語の歌に関して」の項目に分類し分析した。

発表に関しての記述が多くみられた。発表に関して、さらに分類したところ、「達成感」、「発表態度」、「次回の発表に対して」の記述が見られた。「何度も練習して発音でつなげるところもうまく歌えるようになった」、「パワーポイントは見やすく作ることができた」など、自身ができるようになったことに達成感を感じている記述があった。奥羽(2016)でアクティブラーニングは「自信」と「達成感」を生徒に与えたと報告しているように、「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」でも達成感を感じたようである。一方で、できなかったことに注目している学生もいる。

発表態度に関して（「自信を持って大きな声を出せると良かった」と発表を振り返り、自分の発表を客観的に評価している様子が見受けられ、メタ認知の発達が見受けられた。

さらに、今回の発表がきっかけで次回の発表に目を向けた学生もいた。「また違う発表をやってみたい」など、発表に挑戦したいという前向きな記述があった。また、発表に関しての記述が多いことから、学生は結果を重視する傾向があることが分かった。

次に多かった記述は、発表準備に関してである。「発表がグダグダになってしまったので、計画的にもっと行えば良かった」などの準備不足を感じた学生や、「自分たちも完璧に歌を覚えられていなかったのも、みんなも完璧に歌うことが難しかったと思う」などの歌の練習不足を感じた学生がいた。その一方で準備段階でできたこと（「みんなで協力してアイデアを出してくれて、パワーポイントを作ることができた」）など、グループワークだったために達成感を感じた学生もいたようであり、発表のプロセスを楽しんでいた学生がいたことが分かった。森・溝上（2017）では、能動的な学習には、「活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」（p6）とし、思考したことをかたちにすることが大切だとしているように、グループで協力して考えるプロセスに言及している学生がいたのは、本活動が能動的な学習であったと言えるのではないかと考えられる。

子どもの英語の歌に関しての記述では、「子どもたちに教えていきたい」、「小さい子供と一緒にやるのも楽しい」という将来を見据えた記述が多く見られた。阿部（2010）では、子どもの英語の歌は学ぶ楽しさや参加する楽しさを与える効果があるとしているように、本活動で子どもの英語の歌と扱ったことが、学生に楽しいという気持ちを与えたと言える。また、山邊（2016）でアクティブラーニングを取り入れたところ社会への貢献を意識した記述が見られたように、保育士になった時に実践的に使えるという記述を挙げている。

また、「他にも英語の曲を調べたい」、「子どもの英

語の歌をもっと知りたい」、などの学習意欲の促進についての記述もあった。保育士養成課程の学生にとって子どもの英語の歌を歌うことは満足感がある（今村, 2015）ことから、またアクティブラーニングの授業が学習の意欲を高める（白井, 2011 及び山邊, 2016）という結果からも、子どもの英語の歌、アクティブラーニング両方からの効果があったと言える。その他子どもの英語の歌に関しては、発音、繰り返し、歌詞の提供に関して挙げられていた。歌は英語のリズム（プロソディ）を学ぶ際に効果的である（中山・廣瀬, 2012）と言われている。本研究では明示的に音声変化などには触れていなかったのにもかかわらず、学生が作成したスライドには歌い方の工夫として、音声変化やプロソディについて述べられているものがあつた。例えば音の連結や、強弱である。また、繰り返しに関しては、「1回ではなく何回もやるのが大切」という気づきがあり、繰り返し練習することが歌を習得する際に大切だと記述している。「文字があると歌いやすい」という記述もあり、音声だけでなく文字があることで学生にとっては歌いやすくなるという気づきの記述があつた。一旦文字を頼りにしてしまうと、音声だけから学ぶことは難しくなる（小川・東, 2017）こともあり、中学校・高校において音声だけでなく、文字も学んできた学生にとっては、スライドに歌詞の文字を付けることで音声の確認をしているのではないだろうか。

以上から、「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」から自身の「できたこと」または、「できなかったこと」などの記述が見られ、多数の学生が自身の活動への取り組みを客観的に評価していることが分かった。また、将来の職業を見据えた記述や、学習意欲の促進の記述から、子どもの英語の歌の効果、またはアクティブラーニングの効果が見受けられた。さらに、少数の記述ではあつたが、発音や繰り返しや文字での気づきに関する記述が見られ、英語の歌を歌うために必要なことに気付いた学生もいた。

5. まとめ

本研究ではアクティブラーニングを取り入れた「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を行い、保育士養成課程の学生がどのようなことを感じ、どのような気づきがあるかを検証した。学生は「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を概ね肯定的に捉えており、今後の学習意欲や将来への意欲を高めたことも分かった。今回、担当教員から子どもたちを意識するようにとの指示は出していないのにも拘らず、「保育士になったら」という声が聞こえてきたのは、この活動が保育士養成課程の学生のニーズに合っており、有意義なものだったからではないだろうか。また発表という形ではあったが、学生は教えることを体験的に学んだとも言える。しかし本研究では78名という少人数のデータ結果であり、さらに元々歌うことに抵抗がない学生たちだったこともあり、本活動がどの保育士養成課程の学生の授業にも同じ結果をもたらすとは言えない。引き続きデータの収集が求められる。さらに学生は何度か子どもの英語の歌を聞いているうちに無意識に歌えるようになっていたが、音声変化、プロソディに関しての記述は、ごくわずかな数しか見られなかった。今後はそのような視点に学生の意識が向くような工夫が必要だと思われる。

外国人児童、その保護者、外国人の同僚の増加に伴い、保育士にとって、英語で話すことは今後さらに求められるだろう。そのために保育士養成では、学生が英語の授業に主体的に取り組める授業を行うことが大切だと思う。

参考文献

Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). "Active learning: Creating excitement in the classroom." ASHE-ERIC Higher Education Report No.1.
Gally, Tom (2016)「第4章 英語で科学する」『アクティブラーニングのデザイン』永田敬・林一雅 編, 東京出版会

阿部フォード恵子 (2010)「児童英語教育を学ぶ人のために」中山兼芳編世界思想社
五十嵐涼子 (2014)「保育者養成校における英コミュニケーション1・2の授業の一考察 保育現場による英語活動を通して」『帝京短期大学紀要』, pp.109-118
石原義文 (2016)「英語科におけるアクティブ・ラーニング型の授業を目指して (実践報告) - 高校2年コミュニケーション英語IIにおける, 互いに教えあい学びあう授業の試み」『広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要』第63号
今村梨沙 (2015)「保育士養成課程におけるESPの有効性の考察: 学習者の動機づけ観点から」『Asphodel』50号, pp.192-204.
岩居弘樹 (2017)「第2部教育法の今日的アプローチから 外国語学習とアクティブラーニング」『英語教育と徹底リフレッシュグローバル化と21世紀型の教育』今尾康裕ほか編, 開拓社
小川隆夫・東仁美 (2017)「小学校英語始める教科書 外国語科・外国語活動指導者養成のために-コア・カリキュラムに沿って」吉田研作監修, mpi
奥羽充規 (2016)「大学入学前指導を通じたActive Learningの一実践報告 - Jump Start Englishを通して」『四天王寺大学紀要第62号』, pp.139-162
加茂葉子・藤原愛 (2013)「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する追跡調査ESPアプローチの視点から」『育英短期大学研究紀要』第30号, pp.81-94.
カレイラ松崎順子 (2009)「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する調査 -English for Specific Purposes (ESP) の視点から」JALT Journal, Vol. 31, No. 2
カレイラ松崎順子 (2011)「第3節 保育士養成課程における英語教育の一考察 -ESP 的アプローチを取り入れて-」『幼児・児童における未来型能力育成システムならびに指導者教育システムの開発 平成20年~平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書』坂元昂, 東京未来大学
木浦原えり・真宮美奈子 (2014)「外国人の親をもつ子どもの保育に関する研究 -入所児童数が多い山梨県内の保育所の事例を中心に」『山梨学院短期大学研究紀要』34号, pp.74-87
白井靖敏 (2011)「アクティブラーニング (グループ学習) の経験に基づく学習タイプ」『名古屋女子大学紀要』57号, pp.117-125

鈴木克義 (2015) 「急速なグローバル化と国際保育者養成のニーズ ～外国人保育士への日本語教育と、英語保育者の養成を急ごう」『常葉大学短期大学部紀要』46号, pp.97-104.

中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf> (参照: 2018年8月15日)

中山千章・廣瀬久子 (2012) 「幼児英語を指導するにあたっての諸課題について」『つくば国際短期大学紀要』第39号, pp.15-33

日本保育協会 (2008) 「保育の国際化に関する調査研究報告書」

森朋子・溝上慎一編 (2017) 『アクティブラーニング型授業としての反転授業』ナカニシヤ出版

山邊昭則 (2016) 「第3章 学習者と社会の架け橋としてのアクティブラーニング」『アクティブラーニングのデザイン』永田敬・林一雅編, 東京出版会

(ふなた まなみ・しぎょう ともこ

かれいら まつざき じゅんこ)

【受理日 2018年10月23日】